

改 革 事 例

「総合的な学習の時間」での探究学習の実践を 起点に、カリキュラム・マネジメントを推進

佐賀県立佐賀西高校



◎佐賀藩の藩校・弘道館の流れを受け継ぐ伝統校。「質実剛健・鍛身養志」を校是に掲げ、次世代の日本・世界をリードする人材の育成を目指す。生徒の希望進路を実現するために、課外補習や個別指導の充実に力を注いでいる。

◎設立 1876 (明治 9) 年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1 学年約 280 人

◎2019 年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東京大、京都大、九州大、佐賀大、熊本大などに計 210 人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大などに延べ 288 人が合格。

◎URL <http://cms.saga-ed.jp/hp/saganishikoukou/>



各世代の教師による プロジェクトチームを結成

国公立大学の現役合格者数が例年 150 人以上に上る佐賀県立佐賀西高校では、2017 年 10 月、高大接続改革や次期学習指導要領の実施を見据えて、自校として育成を目指す資質・能力と、それを育成する方策を定めるために、学校ブランドデザインの構築に着手した。松尾敏実校長は、そのねらいを次のように語る。

「新しい大学入試では、学力の 3 要素が評価されます。それを受け、本校として学力の 3 要素を具体的にどのように育成していくのか、教育課程や指導のあり方を明確化する必要がありました。また、今後大学入試で活用が重視される調査書の作成のためには、私たち教師が生徒の活動を適切に評価する必要があります。そもそも、どのような資質・能力を持った生徒を育てたいのかを、学校教育目標において明確化しなければならぬと考えました」

構築の中心を担ったのは、教科・科目、分掌、年代の異なる 5 人のメンバーから成る「高大接続改革プロジェクトチーム」(以下、PT)だ。

「多様な意見が出るよう、ベテランから若手まで、各世代の教師をメンバーに入れました。さらに、『自分たちが学校を変えるんだ』という意識を若手教師にも持つてほしいと考え、リーダーには若手教師を抜擢しました」(松尾校長)

松尾校長が PT に検討課題として示したのは、①これからの時代を生きた生徒に学校として身につけさせたい資質・能力の明確化、②「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の見直し、③調査書作成に向けたポートフォリオの活用だ。

同校では、学校教育目標に「知育・徳育・体育の充実により、人格を磨き、グローバル社会の中で、高い知性と広い視野を持った、将来の日本や世界をリードする人材の育成を目指す」ことを掲げている。育成を目指す資質・能力は、その学校教育目標を具体化するものとして検討した。

総合学習については、それまで、3 年間を通じて進路学習中心だったものを、1・2 学年では探究学習中心に転換させることを検討した。それにより、思考力・判断力・表現力や主体性・多様性・協働性を育成したいと、松尾校長は考えた。

*「学校教育デザイン」とは、本誌が 2017 年度 6～12 月号の特集で提唱した、「学校教育目標からカリキュラム・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、授業・指導改善までの一連のサイクルが、カリキュラム・マネジメントを通じて実現される学校改革の営み」のこと。

総合学習を中心に、 各教育活動の関係性を整理

P Tがまず取り組んだのは、「西高生が身につける資質・能力」(図1)の設定だ。さらに伸ばしたい生徒の強みや補強したい弱点などについて話し合いながら、育成を目指す資質・能力を絞り込んでいった。P Tメンバーの山口司先生は、その話し合いの内容についてこう振り返る。

校長
松尾敏実

教職歴37年。同校に赴任して3年目。

進路指導主事、高大接続改革プロジェクトチーム
北川宏武
きたがわ・ひろたけ
教職歴27年。同校に赴任して13年目。

1学年主任、高大接続改革プロジェクトチーム
鶴田有紀
つるた・ゆき
教職歴25年。同校に赴任して5年目。進路指導部。

進路指導部、高大接続改革プロジェクトチーム
山口司
やまぐち・つかさ
教職歴21年。同校に赴任して3年目。3学年担任。

教務部、高大接続改革プロジェクトチーム
野崎宏一
のざき・ひろかず
教職歴14年。同校に赴任して7年目。2学年担任。

図1 「総合的な学習の時間」、教科指導、進路指導、
生徒指導の関係

校是

質実剛健(まじめで、たくましく、しっかりしていること)
鍛身養志(心身を鍛え、高き志を養う)

学校教育目標

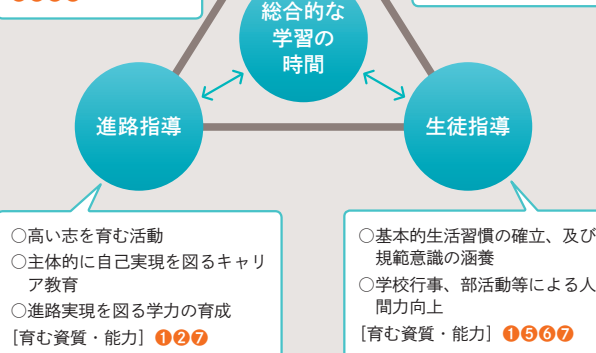
知育・徳育・体育の充実により、人格を磨き、グローバル社会の中で、高い知性と広い視野を持った、将来の日本や世界をリードする人材の育成を目指す。

西高生が身につける資質・能力

- ①主体的判断力 ものごとを多角的・多面的に吟味し、主体的に判断する力及び主体的に行動する力
- ②自己認識力 自己の思考を客観的に捉える力
- ③課題発見力・解決力 問いを立て、解決に向かう力
- ④説明力 他者に自らの思考を過不足なく説明する力
- ⑤協働力 他者を尊重し、協働して行動する力。他者を思いやる力
- ⑥自律力 基本的生活習慣を確立し、自律的に行動する力。規範意識を持って行動する力
- ⑦実践力 自ら考えて行動し実践する力。自己実現を図ろうとする力

○主体的、対話的で深い学びの実現
○カリキュラム・マネジメントの確立
・授業デザインとシラバス設計
・指導法研究(授業、教材等)
・模擬試験等を活用したPDCAサイクル
[育む資質・能力] ③④⑤⑦

○社会の中の課題を発見し、解決に向け主体的に探究し、行動する姿勢の育成
・社会問題研究
・テーマ別探究
・プレゼンテーション、小論文
[育む資質・能力] ①②③④⑤⑥⑦



* 学校資料を基に編集部で作成。

「例えば、本校の生徒は、プレゼンテーションの機会を与えると、とても上手に発表します。ただ、そこでの説明が深い課題意識や思考に基づいたものかという点、十分ではないという意見が出ました。今後も、生徒の長所である『説明力』は伸ばしつつ、課題意識をしっかりと持って物事に取り組む姿勢も育みたいという点になり、育成を目指す資質・能力に『課題発見力・解決力』や『自己認識力』が上がりました」

P Tがまとめた資質・能力の案は、

「主体的判断力」「自己認識力」「課題発見力・解決力」「説明力」「協働力」の5つだった。松尾校長は、それらの資質・能力を身につけるための土台となるものとして、「自律力」と「実践力」を加えて、「西高生が身につける資質・能力」を7つとした。

目標を定めることと並行して、総合学習と教科指導、進路指導、生徒指導の関係性を議論した。そのねらいは、それぞれの教育活動が7つの資質・能力のどれを育むのかを示すとともに、教育活動同士がどのような関係性で育むのかを決定した。

た(図1)。

また、ポートフォリオについては、総合学習を中心とした生徒の諸活動をより細かく記録・蓄積・活用できるツールとして「Classi」(※1)の導入を決定した。

* プロフィールは2019年3月時点のものです。

* 1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

図2 「新・理想の星プロジェクト」(総合的な学習の時間)の目標と3年間の流れ

目標

探究の見方・考え方を働かせ、自己のあり方・生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 探究の過程において、探究の意義や価値を理解するようにする。
- (2) 自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。
- (4) 学習活動を通して西高生が育むべき7つの資質・能力を育成することを目指す。

3学年●キャリアデザイン：キーワード「見通す」視点①1・2年次の研究・探究テーマ ②自分の進路希望(大学・学問)

前期「キャリアデザインⅠ」②、④(個人・レポート)

ガイダンス → 自己分析・大学分析 →

社会問題考察・グループ討議 → 志望理由レポートまとめ・模擬面接



後期「キャリアデザインⅡ」②、④

(個人・ワークブック)

2学年●テーマ別探究：キーワード「深める」視点①自分の研究テーマ ②自分の進路希望(職業・学問)

前期「テーマ別探究Ⅰ」①、③、⑤

(グループ・ポスターセッション)

ガイダンス・グループ分け →

グループ研究 → ポスターセッション

体験を踏まえた認識の変容・深化

(個人・レポート)

自主研修 達人と話そう

小論文模試(課題文型)

後期「テーマ別探究Ⅱ」③、④、⑤(グループ・ポスターセッション)

グループ研究(フィールドワーク、アンケート、

インタビュー調査等) → ポスターセッション

→ 取り組みの振り返り・

ポートフォリオ作成

小論文模試(志望理由書)

1学年●社会問題研究：キーワード「拡げる」視点①SDGs ②世界・日本・佐賀

前期「社会問題研究Ⅰ」①、③(個人・レポート)

ガイダンス → レポート作成1 →

グループ討議1 → レポート作成2 →

グループ討議2 → 報告会

考えの変容/認識の深化

(個人・レポート)

自主研修 職業人の話

小論文模試

後期「社会問題研究Ⅱ」③、④(個人・レポート)

レポート作成1 → グループ討議1 →

レポート作成2 → グループ討議2 → 報告会

→ 取り組みの振り返り・

ポートフォリオ作成

大学出前講座

文理選択

小論文模試

*学校資料を基に編集部で作成。

SDGsを軸に、探究学習の3年間の指導計画を設計

PTで最も議論したのは、探究学習に転換する総合学習で行う「新・理想の星プロジェクト」についてだった。まず、3年間を通すテーマについて検討した。PTメンバーの野崎宏一先生は、次のように語る。

「PT内で一致したのは、社会問題に対する生徒の視野をさらに広げたいということでした。ちょうどその議論をしていた頃、担当していた1学年の総合学習でSDGs(*2)に関する書籍を読ませたところ、生徒たちから社会問題に対する様々な意見が出てきました。その様子をPTのメンバーに伝え、SDGsは総合学習のテーマとして最適ではないかと意見がまとまりました」

18年度には、「大学入学共通テスト」の実施初学年である1学年団だけに負担をかけるのではなく、ともに探究学習を改善していくために、1・2学年団でその計画を実践した。1学年では、SDGsで掲げられている17の目標から、前期と後期で異なるテーマを生徒一人ひとりに割り振り、個人で探究学習を行わせた。

そして、問題解決案をレポートにまとめさせ、それを基にグループディスカッションと報告会を行った。18年度からPTのメンバーに加わり、1学年主任として「新・理想の星プロジェクト」を進めた鶴田有紀先生は、その進め方にした理由を次のように説明する。

「生徒に関心のあるテーマを選ばせるのではなく、教師がテーマを割りあて、普段は関心のないことに目を向けさせようと思いました。また、グループでの議論の前に個人で探究学習を行わせたのは、まず自分のものの見方や考え方、問題意識を認識させようとしたからです」

2学年では、グループ単位でSDGsに掲げられた目標の中から1つを選ばせ、探究学習に取り組みさせた。例えば、環境問題でも、水問題や地球温暖化問題、森林伐採など、生徒によって関心のあるテーマは異なる。そうした生徒が1つのグループとなつて様々な視点から議論し、課題や問題解決策の共通点・相違点を見出すことで、他者と協働する力を育みつつ、自分の思考を深めさせることをねらいとした。そして、最終的には活動内容を1枚のポスター

*2 Sustainable Development Goals の略。2015年に国連が掲げた、持続可能な開発目標のこと。①貧困をなくそう、②飢餓をゼロになど、17の目標と169のターゲットから成る。



生徒を信じて 力を伸ばすことの 大切さを学んだ

鶴田有紀先生

進学校には、大学入試に対応できる学力を確実に身につけさせ、生徒が希望する進路を実現するという役割があります。ですから、「生徒の主体性を伸ばすために、もっとこういうことができたらいいな」と思っている、これまでの取り組みを大きく変えるのは勇気があることです。

そうした中で、高大接続改革によって「大学入学共通テスト」を受験する初学年の生徒が入学してきたことは、新しいことにチャレンジするチャンスでした。「自主研修」に代表されるように、生徒自身に任せて行動させてみると、私たちの予想以上に主体的に取り組み、自ら自律力や実践力を伸ばしていました。もしかしたら、教師が生徒を枠にはめていたのではないかと反省しました。生徒の力を信じて支援することの大切さを学びました。

にまとめて、1年生や佐賀大学教育学部附属中学校の2年生、保護者を招いたポスターセッションを行った。また、評価の高かった2チームが、学校代表として、19年3月に行われた「京都大学ポスターセッション2018」に参加した（写真）。

そして、1・2学年で行った取り組みをよりよいものとするために、3年間の計画を見直した。最終的には、1年次では、SDGsが掲げる目標を考えさせて視野を広げ、2年次では、1年次に醸成された問題意識を更に深める活動を行い、3年次には、社会に対する問題意識を希望進路やその実現に結びつけていくという流れにした（図2）。

生徒自身が主体的に考え、 経験を積む場面を多く設定

7つの資質・能力を育むために、生徒が主体的に考え、経験を積む場面を数多く設けた。例えば、18年度の夏季休業では、1学年を対象に「自主研修」を実施した。それは、生徒が経験したいボランティア活動やセミナーなどに、自分で申し込みや交渉を行って参加し、その成果をポートフォリオにまとめるという取り組みだ。

当初、教師からは「生徒にすべて任せても大丈夫か」と心配する声も上がったが、始めてみると、生徒たちは自分で体験先を見つけ出し、交

渉することができていた。中には、保護者の知り合いをたどり、東京のJAXAの研究者に話を聞きに行った生徒もいたという。進路指導主事の北川宏武先生は、自ら行動する大切さを生徒に常日頃から伝えていると語る。

「生徒たちには、『大学進学がゴールではなく、大学を卒業した後にリーダーとして社会に貢献し、活躍できる人物になることが大切だ』と常に伝えていきます。生徒も主体性や自律性を身につけることの大切さを分かっているからこそ、そうした活動にも前向きに取り組んでいるのだと思います」

17年度を準備年として、18年度に始めた同校の学校ブランドデザインの構築とその実践は、まだ一歩を踏み出したばかりだ。総合学習だけでなく、教科学習でも7つの資質・能力の育成を図ろうと、18年度の教科・科目の年間授業計画には、単元ごとに7つのうちのどの資質・能力を身につけさせるかを明記しているが、その実践も19年度に本格化させる。

写真 2年生は、4～5人が1チームとなり、4月から1つのテーマで探究学習を行い、その内容を1枚のポスターにまとめた。学校で発表会を行った後、学年代表の2チームが、「京都大学ポスターセッション2018」に参加。全国の国公立高校30校、約200人の高校生が集まる中、代表チームは、自分たちの研究成果を堂々と発表した。

松尾校長は、一連の取り組みの完成度を高めていきたいと語る。

「校長の役割は、学校全体の方向性を示すことで、具体的な教育デザインを描いていくのは現場の先生方です。これからも学校全体で議論しながら、取り組みの質の向上を図っていききたいと思います」